

〒467-8501 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1番地 Tel 052-872-3452 Fax 052-872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp HP: <http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute>

■ 人間文化研究所が2年目を迎えました。

名古屋市立大学人間文化研究所も、2年目を迎えました。今年度も、共同研究プロジェクトや各種シンポジウム、年報やニュースレターの発行など、各活動を充実させながら、研究の輪を広げていきたいと思っております。

■ 2006年度共同研究プロジェクト決定！

今年度は、昨年度からの継続プロジェクトに新規プロジェクトを加え、7つのプロジェクトが進行します。

□ テーマ：名古屋の環境・文化・まちづくりと観光に関する学際的研究（新規）

研究代表者：山田明（人間文化研究科教授）

研究分担者：服部幸造（同研究科教授）、吉田一彦（同研究科教授）、成田徹男（同研究科教授）、阪井芳貴（同研究科助教）、堀江孝司（同研究科助教）

研究概要：多様な交流促進と集客力向上による観光振興は、名古屋市の重要な行政課題である。本研究プロジェクトは、今年度から開講する総合科目「観光」の担当者による、名古屋の観光に関する学際的研究である。人間文化研究科の特色を生かして、歴史・文化・地域社会・環境・まちづくりなどの分野から観光にアプローチして、名古屋市などへの政策提言により地域連携を推進するとともに、その成果を学部教育にも活用していきたい。（名古屋市立大学特別研究奨励費採択）

□ テーマ：東海地方における漁村・山村の歴史と文化－開発・環境・生活文化（新規）

研究代表者：吉田一彦（人間文化研究科教授）

研究分担者：白水智（中央学院大学助教授）、脊古真哉（名古屋市立大学非常勤講師）、原口耕一郎（人間文化研究科博士後期課程）

研究概要：環境の問題を論ずる上で開発の問題は切り離すことができない。環境問題は開発の進展とともに語られてきたという歴史がある。開発は人類の進歩、発展にとって必要なものである。だが、開発の結果、①自然環境、②住民の生活文化や有形・無形の文化財が破壊される場合がある。＜持続可能な発展＞のためには、何が必要な開発であり、環境であるのかが明らかにされなくてはならない。本研究では、それを明らかにし、山や海の開発と環境の問題に対して発言していきたい。



『人間文化研究所年報』の本文を、研究所ホームページ上で閲覧することができます。各論文をPDFファイル化して掲載しており、論文ごとの印刷も可能です。どうぞご利用下さい。

<http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute/publication/publication.html>

□ テーマ:地域研究における記述 (新規)

研究代表者:赤嶺淳(人間文化研究科助教授)

研究分担者:田中啓子(同研究科教授)、佐野直子(同研究科助教授)、谷口幸代(同研究科助教授)、山本明代(同研究科助教授)、成玖美(同研究科助教授)

研究概要:京都大学地域研究情報統合センター、東北大学東北アジア研究センター、本学部国際文化学科の連携研究の2年目で、本学からの6名を含む24名が参加している。研究会の目的は、「調査研究方法じたいと調査における『記述』の再検討を中心に、地域研究における資料の位置づけと、研究成果の教育実践ならびに成果還元の可能性を検討」することにある。本年度は、①調査研究における個別事例のもつ意味、②地域概念と空間の操作的創出、③日本の学界による地域研究の歴史的文脈から、「他者認識の変遷」を中心課題とする。

□ テーマ:名古屋市と東海3県における多文化共生の現状と課題—自治体の外国籍住民施策を中心として(継続)

研究代表者:村井忠政(人間文化研究科教授)

研究分担者:成玖美(同研究科助教授)、菊地夏野(同研究科助教授)、米勢治子(人間文化研究所特別研究員)、小川仁志(人間文化研究所特別研究員)

研究概要:昨年度に引き続き、名古屋市と東海3県(愛知・岐阜・三重)における自治体の外国籍住民施策の実態と問題点を明らかにする。今年度は、名古屋市からの委託研究「名古屋市における外国人の生活実態調査」を実施する。本調査の目的は名古屋市に在住する外国人の生活実態を調査・分析することで、名古屋市の多文化共生施策策定のための基礎的データを得るところにある。また、上記の調査結果の分析を踏まえてシンポジウムを開催し、報告書を作成・刊行する。

□ テーマ:越境する文学の総合的研究(継続)

研究代表者:土屋勝彦(人間文化研究科教授)

研究分担者:田中敬子(同研究科教授)、沼野充義(東京大学大学院人文社会系研究科教授)、谷口幸代(人間文化研究科助教授)、山本明代(同研究科助教授)

研究概要:英語圏、独仏語圏、露・東欧圏、日本語圏における過去および現在の越境作家たちの歴史的文化的な役割とその方向性を考察し、その文化的営為の諸相と意義を明らかにすることを目的とする。今年度は、世界の越境文学に関するシンポジウムを12月に開催する。沼野充義氏、今福龍太氏、西成彦氏、管啓次郎氏がパネラーである。また国内外で越境文学関係の学会参加、およびインタビューと資料収集を行う。(科学研究費補助金基盤研究(B)採択)

◆ 新刊本案内 ◆

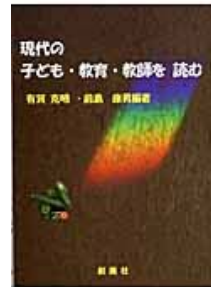
(2006年1月~6月)

・有賀克明(人間文化研究科教授)・前島康男編著

『現代の子ども・教育・教師を読む』

創風社、2006年2月刊、1890円

(↓著者による本の紹介)



「不安の時代と言われます。大人でさえ心配と不安の中でけっこう疲れながら生きていますから、曰く言いがたい不安の中で大人に向かって教育されているはずの子どもたちというのは、もっとずっとたいへんです。そんな現代日本の特質を意識した視角から「子どもたちの今」を中心に、こんにちの教育をめぐる諸状況の現代的な把握を試みたのが本書です。」



・吉田一彦

(人間文化研究科教授)著

『民衆の古代史—『日本靈異記』に見るもう一つの古代』

風媒社、2006年4月刊、1785円

(↓著者による本の紹介)

「日本最古の仏教説話集『日本靈異記』を題材に、奈良時代の民衆の姿を探る本を書きました。著者の景戒のこと、古代の漁民や漁業労働者のこと、「村」の実態、地域社会の様子、金融や女性や市の様子、仏教の流行と私度僧たちのこと。それらの姿を直視することによって、古代国家を「律令国家」であるとする通説を批判し、法とは異なる世の中の実相を描こうと試みました。」

・福吉勝男

(人間文化研究科教授)著

『使えるヘーゲル—社会の私たち、福祉の思想』

平凡社、2006年6月刊、735円

(↓著者による本の紹介)



「本書は新書という小さなものであるが、「社会のかたち、福祉の思想」という重く大きな副題をもつ書物である。西洋哲学史を代表する思想家のひとりヘーゲル—この人と対話しながら、現代を生きる私たちが直面している重要な課題、例えば家族や市民社会の働き、国家の役割、経済格差と福祉などに関わる問題について、公共哲学の視点から論じた。」

□ テーマ:障害児の発達と親の子育て支援プログラム開発 (継続;テーマ名変更)

研究代表者:滝村雅人(人間文化研究科教授)

研究分担者:穂丸武臣(同研究科教授)、野中壽子(同研究科助教授)、奥平俊子(同研究科助教授)

研究概要:軽度発達障害を有する学齢前の子どもたちへの公的支援は未だ不十分な状態であり、保護者の将来的な不安は払拭されていない。そこで、本研究はこのような子どもたちを対象にして、集団的活動の中での個々の行動について、運動発達、生活動作の習得、対人行動等々の観点から分析し、集団での活動の必要性を明らかにする。そこから、地域で生活する障害児とその保護者のニーズに応えられるより効果的な支援方法を開発するものである。(名古屋市立大学特別研究奨励費採択)

□ テーマ:18才のハローファミリーー次世代育成支援のための若者へのメッセージの研究 (継続)

研究代表者:石川洋明(人間文化研究科助教授)

研究分担者:安藤究(同研究科助教授)、山田美香(同研究科助教授)、久保田健市(同研究科助教授)

研究概要:次世代育成支援対策推進法が成立し、次世代育成支援は全国的な急務となりつつある。ここ名古屋市でも、子ども青少年局が発足し、次世代育成支援施策を総合的に実施する体制が整いつつある。名古屋市立大学でも、市の次世代育成支援行動計画にしたがい、「子ども・家庭・地域を考える講座」を開設して「家族観の育成」に従事することが決まっている。しかし、若い世代にどのような家族観を伝えていくかは、もはや必ずしも自明なことではではない。そこで本研究では、若い世代に対して選択肢を提示するという観点から、家族をつくることに関してわれわれが発するべきメッセージを検討する。



■ 人間文化研究科教員の研究動向～外部資金獲得状況より

学際的な性格を持つ人間文化研究科では、各教員が多様な研究活動をおこなっています。今年度、新規または継続で外部資金を獲得した研究テーマについて、以下に紹介します。(本研究共同研究プロジェクトとして紹介したものは除き、共同研究については本研究科教員が代表者になっているもののみ掲載しました。)

□ 科学研究費

・丹羽孝(本研究科教授)「東アジアにおける次世代育成支援政策と地域・国際ネットワーク形成に関する調査研究」、研究分担者:有賀克明(本研究科教授)、山田美香(本研究科助教授)、ほか。

・福吉勝男(本研究科教授)「ヘーゲル「法・権利の哲学」の形成と展開に対するドイツ国制改革の影響に関する研究」

・藤田栄史(本研究科教授)「生産革新・組織革新と雇用・人事システムー自動車産業・電気機器産業の実証研究」

・寺田元一(本研究科教授)「中国医学の身体観がモンペリ工学派の生気論的生命観の成立に果たした役割の研究」

・吉田一彦(本研究科教授)「最澄および天台宗の思想・活動から見た神仏習合思想の受容と展開に関する研究」

・鋤柄増根(本研究科教授)「性格検査における逸脱回答と「どちらでもない」回答はなぜ起きるのか」

・奥田伸子(本研究科教授)「イギリスにおけるエスニック・マイノリティ女性の労働とその変容:1951-1979」

・中川敦子(本研究科助教授)「自己統御機能の芽生えを探る一情動制御の個人差に関する3歳までの縦断研究」、研究分担者:鋤柄増根(本研究科教授)ほか。

・松本佐保(本研究科助教授)「人種問題をめぐる日本と英米の外交関係・英連邦と米国における日系移民の問題を中心に」

・赤嶺淳(本研究科助教授)「定着性沿岸資源管理をめぐり政治性と当事者性の地域間比較研究」

・山本明代(本研究科助教授)「20世紀東欧とアメリカ合衆国の移民の社会史ー第一次世界大戦期を中心に」

・山田美香(本研究科助教授)「中国・台湾の教育近代化と少年犯罪ー近代日本の影響」

・堀江孝司(本研究科助教授)「福祉国家とジェンダー政策についての政治学的研究」

・成玖美(本研究科助教授)「在日韓国・朝鮮人の生涯学習実践史研究」

・R・ムコパディヤーヤ(本研究科助教授)「日本仏教の国際ボランティアと国内におけるNPO・NGO団体の組織化に関する研究」

・菊地夏野(本研究科助教授)「東海地方における外国籍女性の生活から考察する日本のグローバル化とジェンダー」

□ その他機関

・井上禎男(本研究科助教授)「融合期における「放送」法制の日仏比較研究」(財団法人放送文化基金)

リ-エッセイ 人間・地域・共生

第5回 「公共事業・市町村合併・まちづくり」 山田 明（人間文化研究科教授）

激務の研究科長の頃に比べると、研究時間をかなり確保できるようになったが、なかなかペースが戻らない。3年ほど前に『公共事業と財政—戦後日本の検証』を刊行した。硬いテーマだが意外に読まれていて、嬉しいことに2刷を出すことができた。あとがきに「現実の政策課題とかかわらせて、足元から地道に公共事業研究をつづけたい」と書き、今後への決意と課題を示した。「公約」通り早く続編を出したいものだ。

現在進められている構造改革のもとで、公共事業も大きく再編されつつある。バブル時に比べ規模はほぼ半減し、公共事業改革は進展しているかに見える。だが、道路公団「民営化」に象徴されるように、公共事業のシステム・構造はあまり変わっていない。

拙著の第4章「地域開発と公共事業」のなかで、愛知県の大規模プロジェクトをとりあげている。新空港と万博を10数年にわたり調査研究してきたが、「辛口コメンテーター」としては、まだまだ目が離せない。両者とも一見すると順調のようだが、地元負担膨張の構図など後遺症にも注目する必要がある。万博は運営収支「黒字」だけでなく、会場建設費やリコモ・道路などを含めた決算書が大切だ。新空港も前島開発といった関連事業を含めた総合的な評価が求められる。

公共事業とともに関心があるテーマは市町村合併であり、まちづくりである。国策として推進されている「平成の大合併」により、市町村のかたちが激変し日本地図は塗り替えられた。東海3県の合併を共同研究しているが、合併自治体だけでなく非合併・自立自治体も多くの問題をかかえている。最大の問題は「三位一体改革」などによる地方交付税の削減である。高山市や豊田市のような広域合併では、とくに地域自治組織も重要な課題だ。地域と自治体、さらに住民自治のあり方が問われている。

先の国会で「まちづくり三法」が改正された。大型店の郊外立地を規制するとともに、中心市街地の活性化を目ざしている。地方都市の駅前や商店街の衰退が著しい。円頓寺や滝子など名古屋の下町商店街も同様で、まさに社会調査実習のテーマ「商店街をどうしようてんがい」だ。持続可能な都市づくりが課題となっているが、今後とも足元から問題にアプローチしていきたい。



今年度からの新事業として、「マンデー・サロン」を始めました。通常の研究会とは異なり、異分野の教員・院生が気軽に研究交流できるサロンの場として、月に一度、研究所で開催しています。これまでに開催された「マンデー・サロン」の様子は、研究所ホームページの「columns(コラム)」の欄に掲載しています。どうぞ、ご覧下さい。

<http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute/columns/columns.html>

編集後記 今号の新刊案内から、本の表紙画像と著者による紹介文も加えてみましたが、いかがでしょうか。帯の言葉が上手いと、やはり購買意欲がそそられますね。「ヘーゲル、よみがえる！」って、何だか怖いですが。(S)

名古屋市立大学
人間文化研究所